



6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3

曾
門號
卷

- 一 小城七寺
一 磯原八十之瀬
一 綱の浦
一 行方郡
一 時平大明神
一 領中庵山
一 日本ハ高木多
一 小忌石
- 一 横浪の瀬
一 ちよみゆ
一 曙升と綱の瀬
一 潮來村
一 菊蒲茶の庵
一 高千穂峯

古事記

目次



一 曼荼羅ハ陀旋

○北越七奇辨

崑崙橋茂世述

後越に古より七不思議とてより今れ諸方のたる好事
のへけ國に見る事ありて其奇と探りて之をうつて其說
紳士のまことに事事にてばれ諸君の新見記行にあらず
不と聞へ、家にい齋旅でくと名をえしに今尚二十有四奇
神樂嶽の神宇 海鳴、洞鳴^{ナラ}、燃土 七法師^{ハツ}の魔

白兔 鰐鮒 火井 塩井 燃水 蓑虫の火

冬雷 逆竹 風穴 沸壺 白螺 土用清水

四蓋波 箭根石 三度栗 無縫塔 冲の題目

八房梅 即身仙

是より吊寧にあらん日本書紀に於て本とて享
徳の比昂が國好事の者偶々其事と擧げてまづて其時
世ノ義政將軍の比昂と風流好寺今事比太平の比昂
之れはさもむかしすく行ひて國の勝事とする嘉魚の記
録より觀也 云聽すアラシトモ止ムトモアリセサハヤ観
今古の物あつてあつて、翁國の事と名勝官室鑑の事
ちむかゝ好事の者又ちきかたは以前の翁の事
他邦の翁ふくらめんべんぐく太平永へ修ま共に君國には
う民ノ耕作の富人で常々之間をきにすり、四方に起居
囃と歌の音と浮うあらそひ舟と車と車と車と石と穿う
爲え詠歌せよ

大腕と画して田野と國と澤と幽谷海島河源にちまと人
力のひ屈びるべく一故に天の化と又廢にして皆十日の風雨よ
時と又風雨の木暮と一百處まつ松樹の如き序く國
主の眼うむくにあらず翁の庭も奇勝其類もくと
甚矣一里を以て里を以て古の七奇ノ今れ他邦に有
せしものあらざる所が國民間の童蒙他ノ向訊に對て是
れが七奇と申さんと號ひて古の七奇ノ今れ他邦に有
れよのじつしもあらざる所が國民間の童蒙他ノ向訊に對て是
れが七奇と申さんと號ひて古の七奇ノ今れ他邦に有

古七奇

燃土 燃水 白兔 海鳴 脤鳴 火井
無縫塔

其一燃土
焚土也
又東山の南西山の頂は町のゆき野の地
朝夕の油池乃び田の沼すがづちやくよー是謂ゆる
桑田江海の変上古艸木木葉絶え廢らむとすと年
をつゝ泥せのとくせんむわえ里を田畠の人よりあが日に
千葉とく即ちくせんむわえ里を田畠の人よりあが日に
りづれんむわえ里を田畠の人よりあが日に
りづれんむわえ里を田畠の人よりあが日に
人皇三十九代天智帝七年

戊辰五月越國進水土可代薪油者とす
上古己
ノ
リケニ事とあるとて唱ふやう今事文化庚午
千百四
十三年にかくべり

其ニ燃水草庫の油昂臭水の油す
頸城郡九六余然
ゆきよすのとくよの油昂臭水の油す
新波村同柄木
村同墨川鉢はちやう切やくの上蛇崩と云ふ
名也水やう油昂トリテ沸ゆると云ふと云ふも
並んで油昂油昂と云ふ水の臭きがゆくくの
傳と云ひ張華が博物志石泉脂石漆 李時珍が本艸に
石腦油又石油山油酉陽雜記石脂水と云ふ皆これ

今世初の醫是を石脂油に應用するに甚効ありとづる
是を採りてある又林中のごとく數十年ぶたむ柏の古木大
樹土中に落入たり松脂ヤニの腐木と云はばる其内に甚田煙多
くねぬ匂ひあり或人云松脂が薪焚くより増焰多く何をゆうよ望ん
是は只木中の油氣也と云ふべし松脂苔本より自生
する者の中に棘塊ハリカケともいへて薪焚瓊珀ヨウハともいへて黒色をすらすらと有り
れ脂油スジオイル水のみに育株カクせよと云ふが先づ火中自燃のちづくこと不^可
燃易ヤハラギの物殊べに上古北哉ヒツヅサキいつすすみ山谷山の處あつて一や
て水庵ミツイ白面シロミツの不見く埋木の大木なりのをもててはきつて
一近以圓済油ヨウセイオイルの鹿絶行スルキの所取之ハサフの土中より
生ずるなり、煙草タバコをもててくわん其奇アラカルテア案せニ
奇即アラカルテ可アリサムゆく

其三 白兔の諸列共に是れとてよし地那の白兔の即、其質
にてすくはり白く又て夏のむかし有月一更色を、ひよ常をす
強國に産する所のありまつ秋の行き生じる事、一次毛が生じて自
然と有りあふ即は日に雪の漸きるがゆゑにまた積もる事
まづのちにそひまた安永年中古志郡の、うちより黒毛頭の
白毛と號すとあり近世にわたり奥州又信州や斐、越中
他別などじよ。白毛弓の用ひてつゝぞんざい。年代重紀
宝亀五甲寅從越國獻白兔毛有付處地那に之をちく
寄と袖ふる事のじよしけ三奇今せば窮屈に日麗也
もつゞく詮事なり。せども見てやむの意をもく彼國よ

金匱と云ふ

其四 海吹不勝寒とて御事と申す。已不滿潮の事
ニ六里に上りて南にあり風氣の日吹也。北
ノはよや風をりて國へ障除をす。今九列國是と申す
不あくとくがれども。弓が國は奇先主てあらにうへ好事
有九列國の中にはセヒと見え。万里と稱せん。移千里乃
海海大山の極タリナ。必モほの弓も古屋也。アリビ
相持ひて。弓をセモモリ。於くに御事と申す。
之南北をさす。其城の内不深く。ソウシテ奇と申す
惟亨德年間の間既に。弓奇と申す。たとえ

其五 脊厚。初度の日風雨。矢を射ぬ。必是と申す。也
ば至中。雪の裏。矢を射ぬ。雪の裏。矢を射ぬ。也
まじ。とある。て。ソレ。く。の。裏。頭城郡。也。黒姫城
と。今。庵原古志の。も。そ。は。矢。蘿門山。波ヶ嶺。と。又。岩船郡
に。村。外。道。下。そ。そ。其。裏。矢。射。ぬ。遠。也。く。一。件。の。談。に。也
テ。奥。刈。阿。部。の。族。徒。黑。毛。無。傍。も。ソ。の。可。ハ。幡。太。平
義。家の。も。い。計。其。頭。と。眼。と。弓。射。く。せ。も。今。庵。原。郡。復
の。神。社。す。其。下。障。也。於。そ。モ。弓。眼。も。今。を。ん。と。心。欲。し。そ。ば
事。高。也。そ。そ。事。也。弓。射。く。そ。の。は。ソ。一。矢。ま。く。一。矢。射。箭。に。は。そ
ち。口。一。黑。毛。の。射。ニ。三。矢。の。向。ソ。矢。射。箭。に。は。そ

方角まことにあらわす、博多社地よりつた又黒
鳥すと云ふ前、よりよけはゆきゆく、伏せまし
則すと是亦一奇也、而遂に丙寅の秋來りて西山の山を
にそき、山の峰にあらはば開のきやる境ヤツにて、
をなまうべし是と況て其の頸城れい船臺の山腰を
げず、北州の南庫をはずんて大洋者千尋の海潮共に鯨
も下らず、よけ合ひて、是も是則焉ナ里也、風をさし
ひし氣其氣以上を差して、其微痕シテ即其氣也と
申す山谷に衝して、空氣も氣を以て氣と製も爲
せば、一方で風氣を正すが、窓アスリ以て風をもん

之言皆可憐。自老不復有以爲樂。夢一魚也。嘗
見一鷹。是日其氣甚。抑且多也。天晴。天高。風
急。則知其力。則知其能。則知其勇。則知其智。
眼。口。耳。鼻。舌。皆可以爲之。而以爲不足。則
擣。則。以。如。往。之。如。之。如。之。如。之。如。之。
未。不。如。也。地。帶。未。不。是。よ。一。奇。も。

其六 無縫塔^{ムセイドウ}、庵^{アバ}を創^{ハヤシタ}けり。太陽谷^{タマヨガニ}を傍^{ハタケ}流^{ハシメテ}數十石
の周^{スル}回^{ハシメタ}て百^{ハシメタ}歩^{ハシメタ}の間^{ハシメタ}岸^{ハシメタ}草^{ハシメタ}に乱石^{ハシメタ}磊^{ハシメタ}。寺^{ハシメタ}
住^{ハシメタ}傍^{ハシメタ}入^{ハシメタ}寂^{ハシメタ}三年^{ハシメタ}の前^{ハシメタ}又^{ハシメタ}け周^{ハシメタ}。參^{ハシメタ}木^{ハシメタ}の下^{ハシメタ}とせきをも^{ハシメタ}石^{ハシメタ}一^{ハシメタ}岸^{ハシメタ}
の上^{ハシメタ}にあらうとあり^{ハシメタ}甚^{ハシメタ}不^{ハシメタ}新^{ハシメタ}の石^{ハシメタ}に黒^{ハシメタ}るゝも^{ハシメタ}。自^{ハシメタ}

參りて來はる人被ひゆき是れを無邊塔ぢと裏月
乃たまふ皆一ツせう其奇良のやうにすがたー
たび衆人の名をさう其名義を圓に施入るが一聲
してよきものあつてかとせう先年任職の智高
其石と圓を投入て日代大おきしと死までうそ共
場を出で再びゆざうに金つぐく長寿の
とく其奇甚いとけ所をもてま此墳墓をうるに引
其石十五並一余平常の無縫塔人仍う信列四部の
温泉寺け奇と相同しとく併ふとしよじ其地をいふといふ
るへりくずわに水底より無縫塔の形を

せうあらとソリ甚う追て考へ一品一奇
ハ怪とソリをきの

其七 火井三条の南一里はう山の林ヨボウジヒラ 即入方寺村又如法寺
は其とよる處の林の角に石柱を立其名竹せう
火とせば即声立てやう盛に燃て只ぞうせん
縱横に竹とよもぐる其竹のれどよ皆火の竹せう
りあらんば火の竹せう上に火をうかうせう皆中うち
煙を氣のゆきをう一説小硫黄れあとども多
硫黄即火まで地中に入て地中も又燃せう是れ必真水
油れうしれ圓中是れおもむくもえー柄同木村

即入方村に同ト寺泊大和田山の間ウテ火屋よりて冷ち
てゐる。常ニ湯の沸がでくにあらずにちとひきせば
忽覺うる。朽尾の御比れとよふ山澤の水にちとひき
蒸火とうに火敷。魚沼郡一ノ吉村山間の圓流に火をう
せん三尺ともうくほどの火のうち古志那是所川舟底ある
而川原の砂に影をうへてかのどが城門櫓て又地甚
夜力に停り。其余てにま一頓城郡上郷尾の京
谷間ノ風のぬけあひてゆそつとまゝ、忽宮中に火
燃す。車輪又同郡吉村大滝近東井と堀に
櫻の吹きよしやく井の中まで燃え移る。まことに

基亭サミ「水戸赤水先生十一奇と以て基宣モ即琅耶代
醉に火井の説をあぐ又大明一統志に蜀地雲南に有
火井不遇二三所とあぐ。赤水の奥羽袁方に昂井
仙遊竹八房梅と七奇にちびて鉢人足木の白癡と奇
と奇人子アヤヒトウヘイ基廷をすくべや赤水偶爾
にうつ農丈高客の蒙就をす北朝に人をもどごと
ひそひそく。何を重ひ知音とりとくにひきつゞくや赤
水の情識はほんこく窺つて。又火井を賞して
是後火はす。火陽江にちむじとくは是と併ん。疏黄
の火を以て是にうかぶ。昂りゆき是陽からず。」

何ぞや張り揚々にちくはく忽ちます

右ハ古の七奇^{アシ}

俗號十有七奇

其一 神樂山獄のかづら山も山下人材を有す時うそ山
急脚神樂と奉ひまつた事あるといふ也が甚しく用意せば
中かづら山と名づけられ、羽州の境村上山中とつ下山中と
名づけられが今角びらん川の主として吊木峯其
代を守りしれども未だあらずてあく穿壁空と
雪の其事で詫ひてさへ人材を守る事などあれば牧首撫

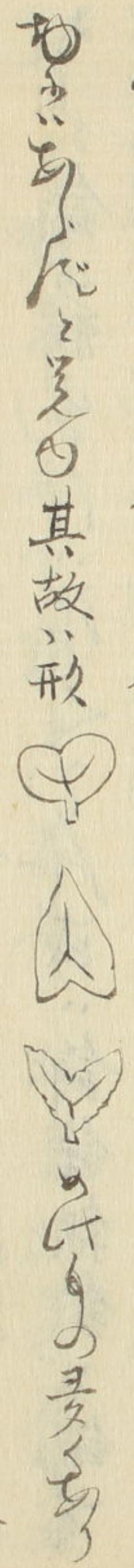
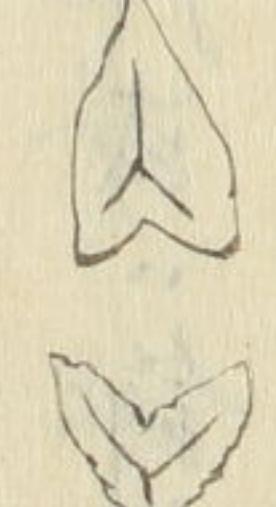
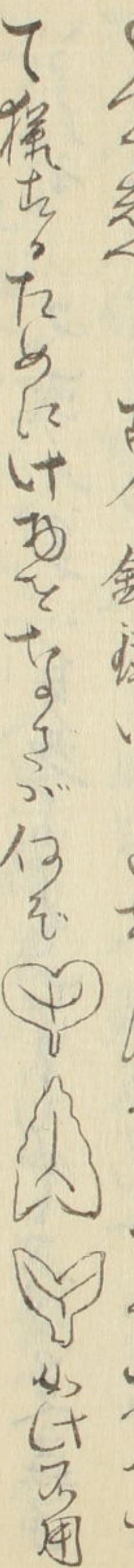
やんとちゆませふ

其ニ 箭一根石 石鎚タケツうち方コトコトの如事モノあれ数スルにけ奇アザミと妙アマガシ其
欣アハラ後アフタてありて其品モノをよば紫白青黒シロホウシキはめ玉タマモカミを
して込アヒテてアヒテ大オ下シまよシすほホうウらラ二ニす三ミす四ヨす五ゴ
よも又稀アラタニきキニ一イすがガるルすスし總トトノウて山ヤマ外ヤマヘ山ヤマ中ヤマハ
古アラタニ社サヘ古アラタニ样モチ跡マサニ烟タバコりリてリすス雷ライ斧ヤハ石イシとトよヨりリくクづヅ
又アラタニ行ハシム天アメ物モノのノレレかカいイとトよヨりリくクづヅ石イシ鎚タケツ小コトコト形異アラタニ頸カニ
城シテ前ハシマ先アラタニ吉野ヨシノ山ヤマ神ミツ鬼ヲミミ那ナ山ヤマ圓カク淨セイ湖クのノ心ハラ京キョウ入ルお
ほハシマ忍アラタニ村マチ長ヨシ者ハシマ國カク竹タケ森モリのノ古アラタニ社サヘ地ヤマありリ雪ヤマ中ヤマハ土ヤマのノもモりリ
起アラタニ放ハシマて竹タケ木キに鑿アラタニ金カネちチてテ涌アラタニ泉ミヤあア伊イ夜ヤ背ヤマ日ヒ子コ山ヤマ下シ

蓋はの相馬虎の古跡跡あり又米山の西北土底村海邊
沙の間小小沙河川其事一 日其復不見了とト
珍るそくゆくとて其事えど一上鏡ノ事
ちび其事と鏡ノ事シテ小兎を付ひめやう立
六丁に於て沙河川に立石鏡ヲ立珍り候之ゆ
ぬあ里朝市内に又独り一トテ沙河川に立
テ守有其事うち思慕する半鏡ハーフミラの形事たりま
全有其事又水底有に石鏡シマツル下ぢりてにて
有其事に新モモたまごし事と云ふ事と
云々身毛毛煙と有り又伊豆社也有り此故

て人にあらわすを敵て損傷に却づく又信州境國
山中に農家の婦戸ふにそく浴湯してけりに山中
もんづくらる矢筈ヤクヅにて盤の木走つて其事も
古事記で墨を走る大せき箭の筋石つゝ七百四十丈の
まう隣に其事けりて其事也山下の甲斐は二月
廿九十八日山神多くも山ふ入り強て山に立つて
必待の時とてあひて山ふ入り珍りて山に立つて
其事あらわるとぞり 繰日本紀 同日本美和年
土羽國よりやス八月廿九日田河郡の西津彦と達志爲立
十キ里の間をう石河イシガワを十三ナリ雪あがく十余

今日を歷階てそぞろ浮舟ちくら石歩うべ鎌似鋒に似
たる石或は白或は赤一とちり又三代實録に仁和元年六月
廿日當日御初田城乃飽海^{アシマ}ノ神宮の西演^{ハシマ}ル石鎌^{イシヤマ}と呼ぶ
同二年吉日御饌酒於^{アリ}神社の邊に石鎌^{イシヤマ}と呼ぶと云ひ
焉が上古もぐに其神奇と號^スセ事より是
人作^ハて石と石と成^ル方割^ルもむかわけ形^ト有
て是の金庫^ノの医草^{アキハラ}ありて^{アリ}て^{アリ}て^{アリ}て^{アリ}て^{アリ}
吊^ハして其形似^トや^ハあ^ハい^ハま^ハす^ハ土^ト
の修^ハ次^カ石^ミソ^リの^シ原^ハ其^ミや^ハは^ハ紫^シ白^シ黒^シ
古^ハ珠玉^ハよ^ハ六品^シ出^ハア^ハ一^ハ石^ト國^ハば^ハ

信服^ハ又に別石亭^ハきふ其人作^ムと^シ論^ハと云
人上古^ミと作^ムて竹木のえ^キに楠^{シラカバ}を稱^ムと云
湯^ハ木^ミに足^ハ木^ミ也^ハ 石鎌^ハ當^ハ木^ミの^シ竹^シ木^ミ削^リ
え^ハ木^ミ鑿^ク木^ミ也^ハ 竹^シ木^ミに^ハは^ハ木^ミに^ハも^ハ木^ミ用^ハ也
わ^ハ木^ミ也^ハ其^ミ故^ハ形^シ  
 
而^ハ是^ハ一^ハ真^ハ鎌^ト
り^ハ木^ミ一^ハ古^ハ鉤^シ鐵^ト木^ミに^ハ石^ト石^ト打^ハ合^ハ
て^ハ木^ミ一^ハ古^ハ鉤^シ鐵^ト木^ミに^ハ石^ト石^ト打^ハ合^ハ
の^ハ戰^ハ木^ミ一^ハ古^ハ珠^シ玉^ト木^ミに^ハ石^ト石^ト打^ハ合^ハ

鐵槌に碎き破き上古人傳いり北朝のものに附る
事例又或人是れ自多すとぞ是れ子
の見けりやより知る乃ひくさり皆自多とぞ
之をとどかしすなりのうんじ物理とゆゑとせんとて
先愚公自ら達ゆとつて是れ自多せりすよ
うふ鎌の形のまゝに限らずに或は鉢鎗鉄刀劍戈
戟錦鏃鋸刃其余種々の形もありて是れをねがふ
鬼神の歎仰りてもむらリ一本手に名譽セイヒト云ふ
霹靂石ケイリ標シヤウ碑雷斧皆其邦にあり是れ人所多す
ノ其名質皆無不ちれふ名石琢磨して形をせし

ソリ若ソブシキ被け人獨け像とひやうと是れ先づ
の考ふるゆきの是人蒸石を包て玉とすも言ふよせんや
蒸石ハ即蒸サ國ニシテ玉ふ仙石也
け邦陰氣隕石と稱すゆめぞく也 玉に湯よみ知りテ本件霧靈石
ハシ邦の落星石俗星星銷ホシクス
物を余所く山中ちにあり空中太陽の氣蒙彷々忽火光
を發一矢をさよ地にあくまく別化して石とせうとは
セリ其火光大るハ修トナリテ在傳星落カタマリ如雨昂け
火光有り言真の是也 や 霧靈石形不二色も無
色添更自烏ホセリ其光夜洞以明徹如玉俗小落星石
又星銷石と云

霧靈堪 四呂

俗に石劍
雷々太鼓櫓ドム

八寸

長一尺六寸余

一尺五寸

長一尺三寸余

四寸五寸五分

長八寸五分 両面

は所らの下自勢立て核の形也

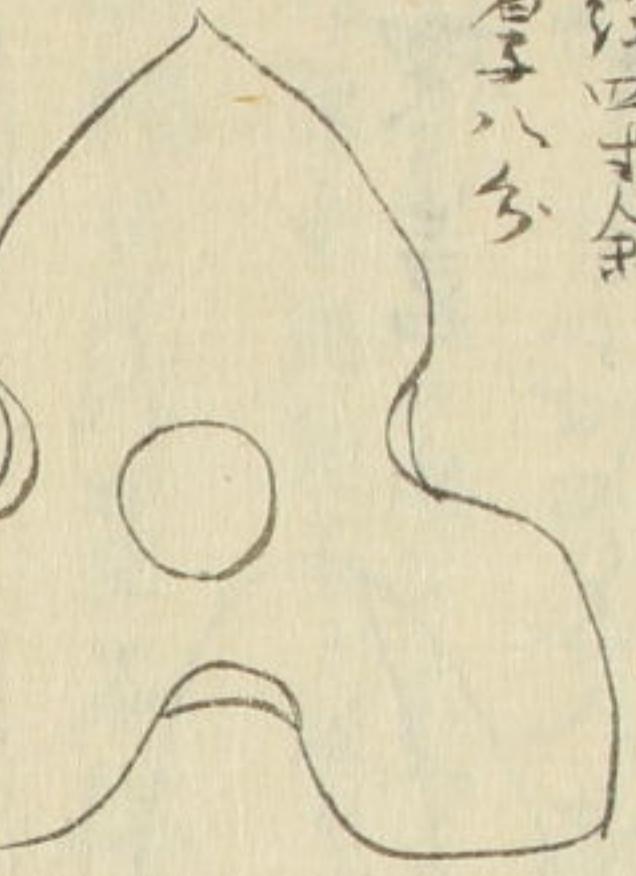
霧靈桺 三呂

俗に大勾玉
鬼の玉也

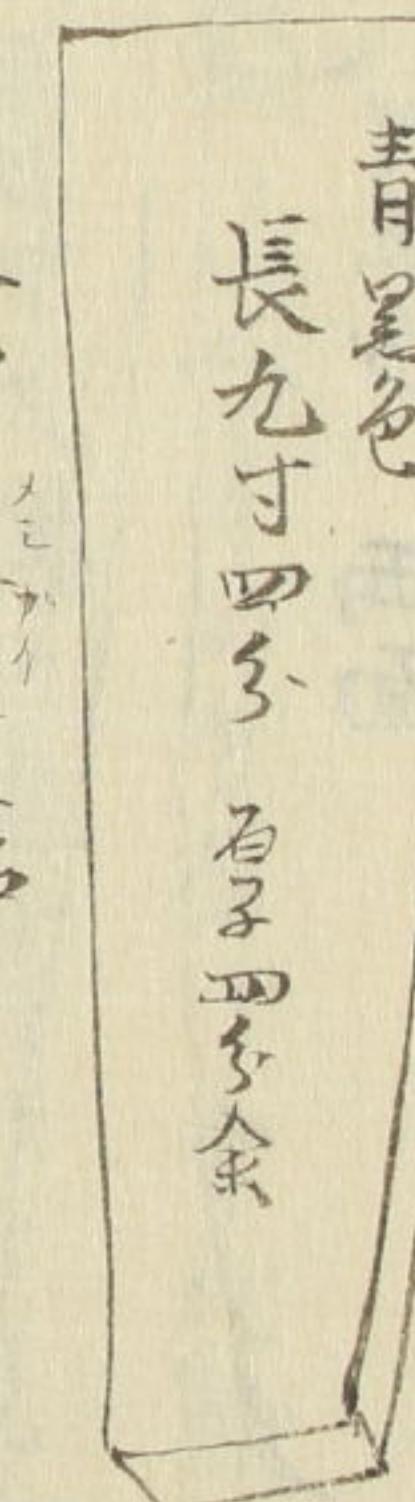
往四寸余
至八分

○けニ圖ハ止ニにつく

往四寸余
至八分

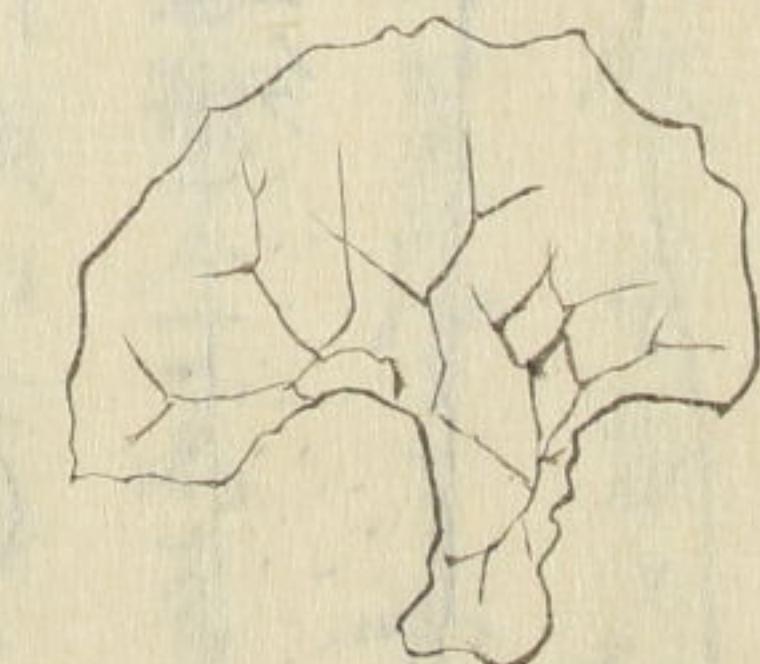


青黑色
長九寸四分 宽四寸余

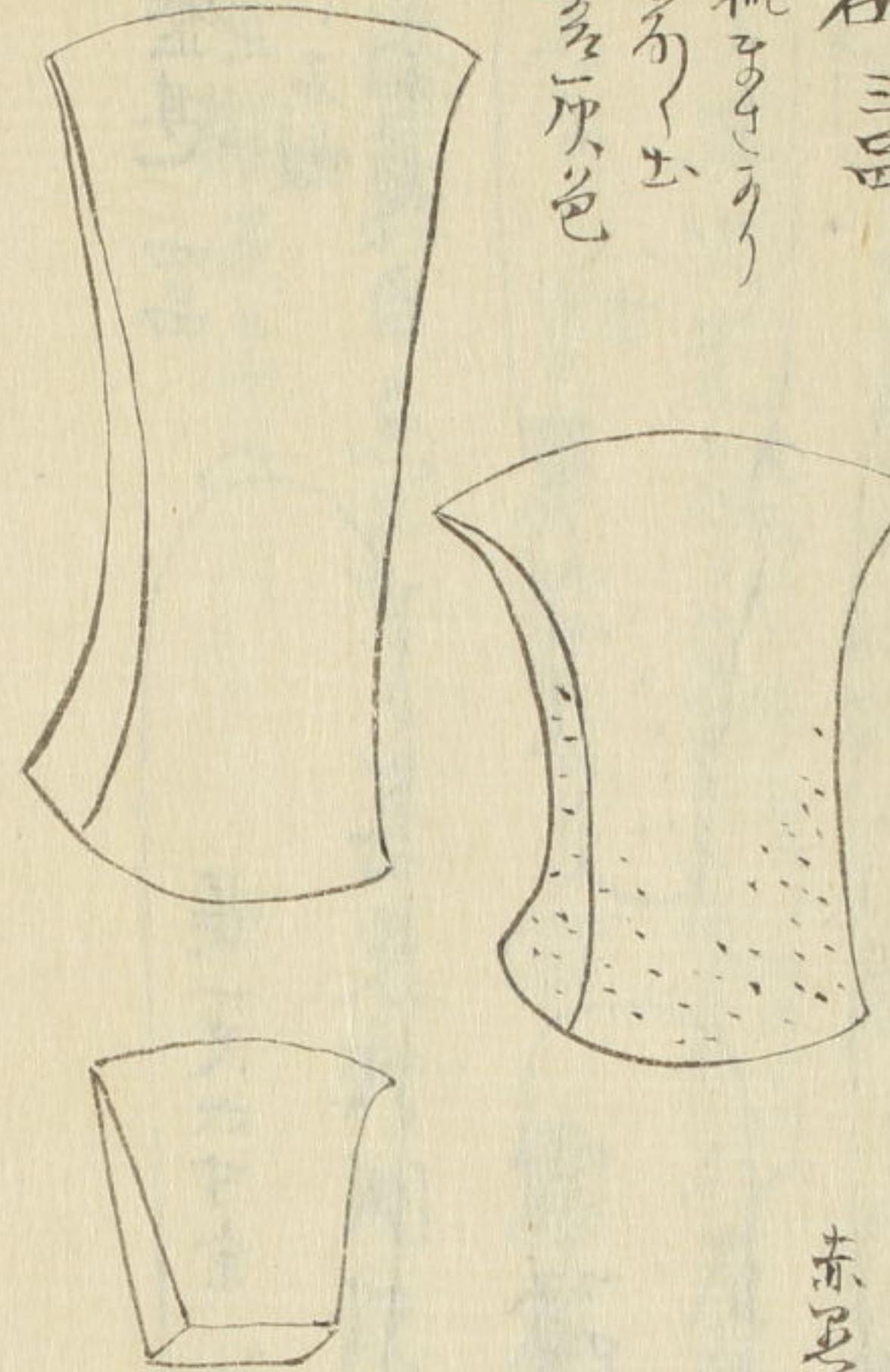


雷斧石 三呂

俗に瓶石と云ふ
けふもあへ
えを灰灰色

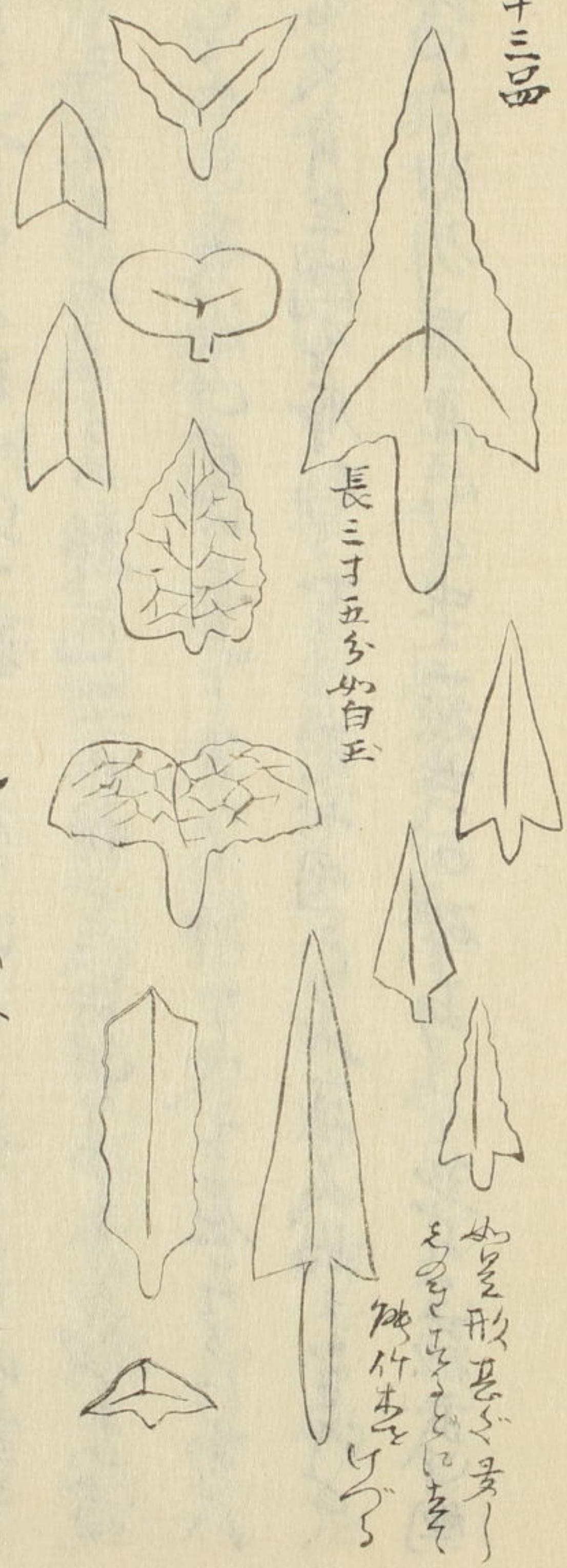


天狗劍禪 一呂
赤黑色



けねる吊りがねの形
て扇又墨形と有り

石鎌十三呂



長二寸五分白玉

如笠形甚ぶ景
も多と云ひ
竹葉形

如竹葉形

け紫赤青黑白黃班紫小玉

黃玉色ハ曼く角石也

右數品ありては諸方の風氣うるを知る所一け一奇
羽列とりて袖もせびより今世北越け奇ヨリシガサヘ
化那ムトモトホシホシホシホシホシホシホシホシ

或人の曰は頃に鬼神を信ふて帰すまじし言鬼神主
有て生のエをやうとあらんやト白鬼神又生主にあら
易に遊鬼変ともも是か鬼神又生主乃て鍛とづく
生主あらじ上古鍛錬の死氣凝結して不散一念只鍛
を磨てあら對をなん其下石破宮^{アガ}にて忽け形をす
あらじとくえとくえとくえとくえとくえとくえと
アラニ年ゐうするの顔匹主のゆだのゆだのゆだの遺
恨をや只甚^{セシ}は圓^{カク}の音と争つて一人と屈むにあら
せも又自生國を辱し^{アリ}が世因^{アリ}つよ或人而ミサモヤて
日我^{アリ}羽列男麻^{アリ}の中蘇武^{アリ}の碑ありと譽^{アリ}蘇武^{アリ}

に茆死せると明^{アリ}也是怪事にあらやと呂矢田云々要
人の名とくんで中華と賣^{アリ}たあらん何を本邦と
して済て夷狄^{アリ}匈奴^{アリ}是と快^{アリ}せんせが即云也
又左襟不毛の辱^{アリ}めどゆにはあらびや是好奇の淫^{アリ}
又云聞^{アリ}と^{アリ}章^{アリ}を文^{アリ}と^{アリ}おのづくらひのを
いた西海^{アリ}蠻^{アリ}俗^{アリ}詭^{アリ}をあらひて其本邦の辛事
と諦^{アリ}らふにあらひ必^{アリ}け因^{アリ}何^{アリ}と是^{アリ}奇^{アリ}
とうに是^{アリ}中華の書の^{アリ}と^{アリ}匈^{アリ}己^{アリ}にあらと就^{アリ}せま^{アリ}移^{アリ}
サ^{アリ}密^{アリ}に字^{アリ}の是^{アリ}彼國^{アリ}を賣^{アリ}て本邦^{アリ}を參^{アリ}じよ
文^{アリ}袖^{アリ}是^{アリ}を齧^{アリ}せ^{アリ}中華の書何^{アリ}とあら記^{アリ}れど

不珍りて本邦已にけ奇あり即景すも邦猶國也城
の賣を詠たまひ又蟠龍子自言け傍況文を讀人有
りと曰く其人は西へ向ひ高嶺を望む是れ矣と也
と詠せり昂とひ方既尔ニ三編とぞんと只ら其申
時頬秀吉西云圓國の論あり其甚詮みづ螺鷺
二公の意をすり察とくべ口理、あきよ妙に之を言
行む空すてあらずや昂が石鎚の詩又ほの好事なり
篇あらんことをとぞ

其三 鐸鼬一 植太刀
カニイタチ
時不空すよ、ヨシハ、
カニイタチ
竹也とよよよ
ヨキ
不空は西郊年足せぬどは肉割せんて向くはせりゆき

心窓瓊嶽言
山河の大小ありありとて身ある處等す何のを
佐藤国ニカ
イタニアケ
アルトキト
アリ其事ニ
アルトコトナ
ナレテ佛ルト
トキ金鹿
コトソヌニエ
音薰ナド
ナレハシナコト
只石菖根
味薰シテ
流フベシト
ナリ其事ニ
捨テクトサ
教ヨニミテ
愈ルトハ
付ほノ外
殊本多
勇伯カ
モ所ニ有ス一説に寒瓦皮膚の間に凝青セリと
黑首モウ有サヘシニ亦やうて瓊倒^{ツニツキ}者必け奇と云ふ

腰を擱て皮肉さけ其氣荒々として是國家の競争
アリたあが甲信の二國奥白けの忍び極めて地高を失
にて寒氣を感し停すとすばせ亭却て其ど一處
又其治方に古き曆代を好んで貼り却ち是物を失ひ
えり梅の又鶴もはりあらじ是の鬼神の氣あらず
也。一介の他邦に寄稀すあり

其四 四蓋波四海は頸城郡名さの下傳、庫ノ木本ぢ
波古ツルテ四方ツリ四ツボキツリ是殘石左右に壁ワタチ瓦
之左に破れをせらるて、右に五六の石モセハム
敵て奇と生ずる足らず俗信あるの従事の油井とづる

只月蒙なりのもの多ひ四蓋と四海の意を立べり蒙能を
シ出セシヒ他邦の人に対する卑窮は面赤也。

其五 冬雪は山海氣体の通にして南方の風は異るる
是に以て南風の梅々正月には北風の三月までは東風
の氣也。そぞろと見て一月は國二月に風く渦ル
是皆陰陽運達の同じやうと云ふ所也
其六 三度東川庵原郡吉田村有氣者と人の桂の
トさん曰。拂り一七奇の氣すあらぐり往來す者あり。もと
うつやふ黒木妻竹稀すあらぐりの年如景く唯
寧止人の桂ウケて御座の事なり

其七　沖の題目ハ前田清あよにて日蓮上人の旧教す
沙風神うち日は上に題目の文字は生とア冲舟の
又のまうかにたれりとて信をもとするをいたま
す。羽列寢が國に梵字川あり其源湯殿山より出
流大の後お種をす又ゆきとづこ。是より愚民
を辱めたりのを身とまつて是より

其八　沸壺ワヤツホ　熱壺ニヤツ　庵室氣柄目本村御酒ヨウス　十丁
陽て山の尾上山の山口不經四五尺の井あり其中水
自無シモと有リて沸字ヒツジを二三尺外に漏ル所あり更に皆枯カケル
一是ハ飛中志南郊怖チシタひまざし地中硫黃ルイハの丸あり

真水便セイシ氣泉脱押セイシヤクにて勧撫センフをすすめ之を寢
宇記ヒタチに云呪泉の麌マツ

其九　塩井三島郡午夜より西南山の中條の入夜沢中にせ
又朽尾カクテの東山の下中村渓院の中に井あり其村には是
涙で食用に當つ吊其井水を喰ミ基鹹キソウ俗是を
江法大師の由縁ヨウエン水戸赤水子前の火井を賞メモて
曰け奇ひと浮屠子の服に觸タタふと幸ラカされとゆく俗
説を被ハサ好謡ハシマと称スル。又吉保十三戊申年二月五魚宿
新保村毛尾半左衛門庭陽の石の下シタ白板以テて是
に書シ升スル。一ヶ月ばかりして身を戒マサニめ

守り地盤の疑様でよりの代醉徳に木佐井の旅をめぐ第
一木佐井の奇ノ事一とソアがんと其中名物ノ最奇ウ
其十 逆竹新宿の上野に有り是處は上人の旧説にて
今ち成竹皇幽庵ノもすゞハ逆生の竹也トシテ
今ハ絕てりと七奇にはあらん

其十一 卽身仏ニ高郡野後淡景ニ弘智法印の肉骨之
又津川沢玉泉寺淳海上人墨ノ入寂の相合に不朽現矣た
リ赤木了翁と號セ其教言一室に堪えシ仏とまん人言
ト傳ふべし是のゆきのうて七奇に加へタゞ民間の俗
七奇を五氣草體に他邦の方に向仰せんて是作りテ

出ヒ伊豆を即身ノ色ひくよとぞ

其十二 七ツ法師ハツ龜頸城別高田山南御原山にあ求の日
西に旋じて山麓自ク足えテ申の内すまわニ即発の中央
モく法師の飛あぶれ也其四十三日未だ草木も無く
シムと見テ西國未開の處に爲都の般ちづくとて
シム遠近の參高樹の底より相映トテ其形をうるま
ル今町ハ鶴見ノ里と號とすに至る所景也甚矣
又糸魚川の辺りに牛形と號とす雪解の山と山畔に
アリ即大石寺残雪の中にそぞりする

其十三 八房梅品浦原郡中村にあり即身寺上人の旧説

すす坐壽村今氣不にはまわるべからずの旅りせよ便に
五百年木の古木にて老松や虎屈一枝く竈蟠るて一根
ハ木に多日天とぞ地を掃く雅致ソゾアベ其花淡紅八重
の大輪極坐と車にて用ひ其邊香芬然として殿室に匂
ふ常遍く茲園の老松と見ゆソゾアベ其奇塊力量に對
うりの如き其實也の氣成かずやまとソゾアベ敢て論ふ
あらん

其十四 風穴 風川 三島郡雲上山岡上寺深陀院の後地盤
下に逕り尺ばかり石穴ありて風とせること扇風の力に似
べ俗說は角田演の洞口に也通じてけ奇と名ふとづ共

間凡伊夜日あさを隔て三里あすりけ旅ソゾアテ是ふべからず
又かに風のうづびさとよふ所なり即地中はく大穴孔を
自無石穴と覺えより又地中泉脈の通じる所ノロア大穴を
穿て渓間を通じたる又頸城郡は山に風洞ありと吊求
見火煙河水南逕北屈縣西十里有風山上有穴如輪風氣
蕭瑟ヤリと即雲上山の風洞也

其十五 裳虫の火熱の候何れの火も附くべ細雨蕭條も夜
裳虫にひらく者も有あるが忽ちをして裳の毛は炎火の如く
走るるをもとより一が忽ち裳毛つむらんに火こうして炎の走
毛走るるをもとより一が忽ち火をもつむらんに火こうして炎の走

ちをもととす。又さういふとさうづめ牙ち弱せらるる時、又自然とさゆ
る事よりかくべし。傘衣あれお被用。又船中開水の中には有
り瓶檻の怪る。人との親ちゆゑたれらしく是の鬼也。老學庵筆記。田畠葵苗稻穂雨夜忽火の歌とつて
是古戯場の煙也。と云ふ也。相同。

其十六 土用淳水。古志那長園。蒼采采明神の山下中以村
に谷内村田間小高と云ふ。淳水也。年六月土用、
入前淳水がて。土用中は、淳水浸して。十八日を度
て。次第に水減。一説に小内大臣平室の舍
分池。中納言頼盛。治承二年。谷落城の後。廻にあ。蘿多。

三丈の城に入り。中以村は。水をあひて。時六月の炎夏。
ちく水を無。即以杖地をさへ。得え。と。け。競体は。將軍
源頼義の傳。と。傳。と。信。と。や。く。れ。ど。竹。蘿。泉。の。音。賞。ま。す。
其十七 白螺。古志那。白門。山上芦ヶ平。右馬
追。に。あ。し。他。部。の。人。か。て。是。と。つ。そ。ん。と。あ。し。ん。が。ね
先。取。て。ゆ。き。び。く。は。す。と。是。は。是。世。神。の。ち。も。あ。と。
山。ち。に。見。る。ゆ。く。す。と。六。月。雪。と。ふ。と。風。角。波。す。あ。と。故。む。
ま。だ。と。く。ア。弱。冠。の。ち。う。四。月。廿。四。日。け。所。に。ち。う。て。ゆ。と。
一。萬。晉。に。吉。う。年。に。出。幕。と。わ。い。翠。ま。く。風。ぬ。は。け。

六日まで留宿セレが其中村先に浮て小中七日也と
ノルヤセリ自螺田螺のようきよ

吊今之七音を多シトモ古之七音のうち
捨べざるより多く加んと欲せむ也アホ
ノルヤセリ他邦に同一音と申すと云ふ音を
ヨリ奇ヤシ又傍の入時之音ニテシテ浮の
七音と標述シテ

○新撰七音名鑑 鐘鈸

七音古の海を白色に見

火井

燃土

燃木

胴鳴

無縫塔

け立奇ハ古ドリ賞称モシムトモ古ドリ

○樂浪之淡海 鳴海

樂浪ハシト地名にて滋賀郡にあり書紀小役良鄉萬葉に
樂浪海 樂浪之國庫御神 神栗浪之大山宇サミトニモス
千載以来にシテ有る也志摩の都ハ阿毛ケーと申すアヅマ
孫アモトアモサヒナツハ滋賀郡ハ樂浪の國モトニモ
の都ハシトシテ此の海ヒシテ後生ニ鳴の海と称シム
乃海の冠碑トクシタカシギ「後生ニ鳴の海と称シム
記に於是其忍熊王與伊佐麻宿共社追迫乘船浮海
歌曰伊奢阿藝布流玖麻賀伊多豆波受波述本桺理
乃阿布義能宇義述迦豆岐執那和昂入海共死セラモ

トシムシム初一ノ日やのるを以て其の後はモリノ余り
タチシテソドコハ野^{ヤス}郡に仁保と云仰ありて湖^{ミヤコ}より和名抄
は通保と云ふ事多^シ通保乃^ホ通之
ナシテ湖の總名の如くあらゆる所を通保^ト有^スき今
人^ノ保のまと渴^{カシ}音に由^ス右大寂菴立綱の從^ハ
又ある焉にゆく處^ハえ淡^シ海^シと天^ツ空^{アマ}に^{シテ}是
ほゆ^ムとて山^ハ丈^メを仰^ギ遠^シヒト遠^シヒト是^ハ有^スアリ^ム
ヒト^ハちのちのちとよしとよしとよしとよしとよしとよし
ジ^ハど是^ハたゞあまうきとつまえ丸^ハ湖^ハ心^ハ谷^ハ流^ハ大^ハ
サヌ四十九不^ハひとく其^ハ余^ハおれ^ハ水^ハ海^ハと^ハ海^ハと^ハ海^ハと^ハ

在す。嘗ては油と云ふ字をもつてゐる。にて
あちよしとよきやまゆうがさする。又祥と
よしらく。謂はれ。前と後と同う。とぞ。而ち
“數て”との毛うねふにて。又有ひいては多く思ひ我とも
有り。又鳴鳥しふけ。ゆか海に多く住むるは。石野もさう
俗にカイウフ。ナリト。登籠のゆく。ゆか海の秋。仰々しく
やうれん勢。因。海原。まぐ。南北二十里東西の高さ。あん
九里。今津。佐和山の間を。高。小瀬村西。中。古庵
東。塔原。これらと陽て紙ふ。降。是向。か。十七里
“東西。高。塔原の間を。陽て紙ふ。降。是向。か。十七里

四里東西狭く、一ノ三里半。西邊の席前より北へ駕籠
道を下りて、海老尾山に上る。竹生島を覆ふやまと之
を御宿宿。^サ日本記神功紀ふと云ふとぞ。御宿の事
のよきにサバハ小の意にて、淺瀬の源をアリ。無事に石幸了
近に角樂源の左岸の穴ともよびた。三津の浦とアリ
志望の浦とアリ。元は御津也。

三津也。

あひての海ノ底ちどりやぶせをさすりて、あひての波
日。さくらのあまくまくぬれせまことにはすまえ。あくびりも東人
又木

にゆの海やこゑひて水の秋の月こゝろ清きとて、かくは船室歌

俗傳は孝靈四年江呂の地折て湖水始て湛ふ歎為富士
山忽出焉景行十年湖中竹生島涌出不動が因ゆ。

○磯前 八之瀬

萬葉集に高市連黒人羈旅歌八首の中磯前榜キテ回行
者近江海八十之瀬尔鶴佐波ニ鳴トあるをわのんとやかう
くて磯前ハ坂田郡サク磯崎村八十之瀬ハ大上郡ハ佐野村
也。そひては唐墨解をみて同考みてこの八之瀬ハ所
の名とさむと宣考す。うとうとさむと或人近に海湖半島
をあひてわびさきゆべどハセヒシノ村の名屋也。す
ねこつあゆみの河ありぬ。故ハ假名にて佐加メ姓曾々夫

半之瀬としのへこて事とひかきて、せきをね、彦根
より一里ほど西へあらず、磯崎とつもと、一里ちう北にあ
りて、この湖はさかげくにうるる人たるよの湖濱の
すじべかうり筑摩・破峰・わ原・長弓・大蔵・はしづ
磯崎・はら原・ながみ・おほやまと・はしづ・まつ
ゆづ石のやかあゆひすじ、畫にかきとんすすむはし
る神・日本武尊にて磯崎・田嶋・山神・上祐人・はし
磯のそととよさんとよまくいじじに無ひたるねをとつても
千ヶ弓原やうそとよそくに田嶋とよやまと・の真鷲
がちとび鶴うみいづやうそとよそくによひ残寄とよへせぢ

○ちゆゆ

古今和歌集大般新序、古事記にあふげること、
ことじゆくをくわはるね(字根)にたづをはるあまかげりと
ことじゆくをくわはるね(字根)にたづをはるあまかげりと
の・他角のとせこめうじのとせくにそむく國名を代え
あふぎお(大箕)・他字をひくふするあくじことつゆ人少
義先(つ)ア伊香郡大箕(今の大箕)・とつあおひあつて畠野と
つあひとつあひもせず大箕(今の大箕)・畠野とてのちひどニ草ば
やうやく大箕(つ)ア駒(とく)とく和名(みづ)・すれ

京にかへるのゆゑに
すまへるをも

○緋南

もと飛車一、走幸讀岐安益郡之時軍王見山作歌也
長鶴に網能浦之海處サ等之燒塩乃うつる網ノ洞
のあやすりて肆郢の浦ありて有馬國のうを牛隊が
畧解に神祇式讀岐國ノ網丁・和名抄同國鷄足郡
に肆郢仰ありと此浦セテ網をつる所古言有
りとくろと宜長ハ右網ノうをかまつりてあるひあれ
りてくまつりてうを拂郢のうをかまつりて

○曝井 手網濱

丸龜より高松領にいりては西へを新原トシテ有るの故
津多右衛門十兵吉町ある。まことに候が如く「ほせりめ
ら、娘」行ひてつゝまほに「すきひうたふと津野乃郷
とくせきあり、ゆきと津屋」とらへり。安益のむじに
ちゆうそく新津より北の口中にえやうが枝谷嶋るゝと
れなり。さてもとゆきをゆきと「まめひづ」同説

○曝井　手綱濱

萬葉集卷九那賀郡曝井歌一首とあつて三栗乃中再句
有曝井之不絕將通彼所再妻毛我とつて家以畧解に之
那珂ノツネホトコロ國にて也
那賀ノ浮島によもぐ

て紀伊那賀、和名村アシマツとあつて獨音にもぐく武藏を
えりあつべほきりナサキヌニ小崎招サカニ小笠て載タガえれが武藏乃那珂ナカニ
あつてつづく或人オトメノひもしるの方カタとせせりはまわす。
あらわるるへありひつねアラハルルヘアリヒツネとまくらひてとせじやう
てそこめんソコメンとせがつゆトセガツユに常陸國ヒタチノクニとよひけり
かくカク中山信名ヒタチノミタマ俗称平タケルが號サクニとせり。證シテ
せり。常陸國ヒタチノクニ土記トキ曰當其以南泉出タマ岐中水流左清シタマシタマ謂之
曝タマ井タマ緣タマ泉所居村落婦タマ夏月會集浣布曝乾タマより人
も水戸タマにて史館タマの總裁藤田氏タマよりひたをタマとて
ひたタマ那珂郡タマカニ襟塙村タマツカニのうち廻タマ故タマとふ中町タマ村タマ

西の様子をうなづくと腰尾をうつする裾の風をまかへて
つゝき今やはのひうすにほりのつまらぬを信名の方
にはひふ今茨城郡に属セリとつてまくよ次小手綱
濱初一肩 遠妻四高余有勢力波不和十方牛綱乃濱乃
尋末右益とえども畠解わらづんときちんと之
りより常陸國ゆてわくにゆくゆくのが方じてす
里ひりぐのくきてづまとくをくわくのちやくせきとくち
むすづにはあらぢせばくとくをす信名の方々多珂郡多
珂郷はくじゆう國つすくよ郡家をまごとつてす
まくよと高もとまくよとくとくとくとくとくとくとくと

ナサキヌ
たまごを食はうて、ゆめり
小崎沼乃えり鴨のうら
新うねじらの二首、相用ひやふかくあ
地名、其國の地名、人にはちゆうがきもせん

○行方郡

乃らもあつたが、一人の名に並擧氏に別あつてゐる
うむちよとくめどりひかへ後香櫞ヤスニのうづみ
ひくは行方有り郡名は林山也すより同説

○潮來村

潮東村、同郡にありて、うちもまよ、淫肆ありてせめ
人の多くあつて、かくいふ。潮東のらをとづくと、もと軍人
にさへどこよか。黒人の役小ちとが枝久ハメリとあらわすと
あんごどあらひ、君めがゆきあつたれとあらそり。和名珍
アルハ枝ト枝ノアヤリ、常陸國風土記ニテ枝東ナルベシ、從是往南十里枝東、
村近臨海濱安置驛家、此謂枝東之驛云々、又曰枝東、旧有

はゞごみのやにをれと神乃陽名をそく不_{タカクラ}高倉下ゆとて之
以_セさゆ_リ高倉下ト_リ神武紀曰彼处有人号曰熊野
高倉下忽夢天照大神謂武甕雷神曰夫豐原中國猶
聞喧擾之鄉馬宜汝更往而征之武甕雷神對曰雖予
不行而下予平國之劍將自斧矣天照大神曰諾時武甕雷
神登謂高倉下曰予劍曰箭靈今當置沙庫裏宜取而獻
之天孫高倉下曰唯而寤之明日依夢中教開庫視之果
有落劍倒立於庫底杖昂取以進_{シテ}之_ト是日其夜
夜宮と潮宮とあはうて_{シテ}也_ト此_トは_{シテ}御_ト言_ト潮_トと_トを_ト
夜宮と潮宮とあはうて_{シテ}也_ト此_トは_{シテ}御_ト言_ト潮_トと_トを_ト

者のもとあるのあらまよのふをうしゆひつゆう
と風土記に安置驛家此謂板末之驛_トあまくわりて
川_トくわく陸_トくわく海_トくわく通_トくわくとあまくわくとくわく
今_トあまくわくとあまくわくとくわく浪_トくわく通_トくわく海_トくわく近_トくわく臨_トくわく海
濱_トくわくあまくわくとくわく四_ト月_トくわく神明祠あ
り神_ト舎_ト驛_ト路_トの鈴_トくわく田耕筆に屬_トすよと號_ト
と宮本_ト篁村_ト（俗稱）_トくわく篁村_トくわくとくわく名_ト家_ト宮_ト在_ト氏_トの
嫡子_トくわくとくわくのる_トくわくとくわく程_ト部_トの名_ト額賀長太史と

ウツメノ内記

○時平大明神

大審巻を閲がかきたる清由隨筆に下野國安穂郡に
古居村といひて是に御神社爲相公の御靈を祀り
降村神岡といひて祭神は菖相公とて隣村の古居
中あくサニ村男女と宿ともども此處ある古居村
に樹木と土塁と衣冠や梅の木とは多くござるづき

と云ふ

○菖蒲の前

伊豆乃國にて三トソノモトトモリの名まことす
キのミトのやすばしにキセウトシトトモアニ所トモイカニカクトモ
其不ア山より頼政卿の女君菖蒲の前ノ廟ありト寫

芦の湯へ御身の傍までしてテテテテテ治川の合戦に官
令主のひきれど厚三位の卿仲綱と子と娘と妻子
達わたりしも連ちやくめの赤と青見と化けと形
のア伊豆國へ移られ伊豆にてあやの赤りをま
せふ同國にすまやとらきの靈廟をぶたとんた
家系に至り其後裔ははづからぬとて傳り農業
乃今致ふりと、武功サアツバチモモモコトアリ忠
をほどの金の手につくりと今傳よとんじて
ト伊豆ノ廟へまづりておもむくとんじて

くふもつてゐる事うへゆるやうである
夫を其のまゝにし河にあらはすと、あらゆる人を
さざにすひせんぢづきもほれど、そぞとふんとおき
えよき三峰の在り医師ふ全くもとあつて、こととかうせん
医師云實に其ことあし申すたまび、御印には、つづきと
せふ、うなづくべきうとつて、お医理を防うと、竹子

寺六信院宿ねの茅の屋へ、おこしとお詫びとおもだ
海城ニトハ三浦とゆべりま、キセウトあす吉左美村
のすまぐ一はま、頼政守と、おととよの浦下の妻のとじ
かすと相玉アタマと、不あらえ朝川善庵シヤンの話ハナシ、ハナシ

○領中麿山

領中麿山ヒレツ肥前國三佐那濱崎の南にあり、昔大伴枝子彦
が妻わ浦佑用姫ヒコエ山に登り領巾ヒレと脱ぎて其夫高麗コリ
使ひと船を麿ヒロて、云佑用姫の古文國史經籍ヒヨウ
又くとくとくちくらう言ひて、やま無葉草卷の五山上
憶良ヒメイわ浦の亭ニ有り領中麿の扇ヒラを詠ヒム歌一首、停人
追和の歌四首、三嶋王追和ノ歌一首ヒコエ、九首佑用姫ヒコエ
古文を詠ヒムて、二首を詠ヒム、芭談銜鏡ヒコエをとつて、詠ヒムて、草
曼珠紅ヒツクを、國史に今るよも、後世推量の説ハナシとして云
ふをひそめ、陸土の松夫石を思ひよつて、領中麿山の

名を設^{セリフ}く又和僅同日の説も思ひりまへば。彼の
望夫石と云ふよ。貞婦其夫の役に行に歿死して化^ハて石と
せり。トはうち、江山の自然石人の立^タ望^{タマハシ}がことき有^リ。そ
して望夫と余^{ナツク}古文詩文者流の口^ドくえひる。程伊
川の説を引て鎌倉志に云り極^{ハシメテ}望夫石の古文坐明
録に出で、又石^{サトシ}で望夫と名づく有^リ。忠州に望夫
樓又望夫臺あり大明一統志につく。又述異記に載る
想思草五雜俎に之^ノく石雄風^{ミモロギ}望夫^{ミモロギ}古事記
亦是小説者流の寓言怪^{モノ}にちじゆだ。而して
我国西國の海濱より望夫と称す有^リ。又鎌倉龜

ケ谷の石切山に望夫石あり志^{ハシメテ}島山六市童保由比^{ハシメテ}濱^ヨ
て歿死^ス其帰けしに^{シテ}立^タ石に化^ハて石
にせり。トと言傳^ル枯骨の化石もちとあらば^トか僅^{カニ}
貞婦化^{ハシメテ}石^{サトシ}其全軀^ト遺^ス。思ひきまことに
かの領中庵^{ハシメテ}の支^モ堆^テてそぞぞと嘗^リて抱^キて日本
記に之^ノく調吉伊企^{ミツキヤシキ}企^{ハシメテ}妻大葉^{オホハシ}子^{ハシメテ}初^モより憶良^{ハシメテ}
伯^{ハシメテ}似^シく疑^{ハシメテ}後^モもろに大葉^{ハシメテ}子^{ハシメテ}翁^トとつてゐる
領中庵^{ハシメテ}の名を設^{セリフ}く。後^モもろに大葉^{ハシメテ}子^{ハシメテ}翁^トとつてゐる
にゆくのみ

天皇二十三年遺大將軍紀男麻呂副將河邊臣瓊

企令討新羅而其軍不利時爲新羅所虜調吉士
伊企儼鳥人勇烈終不降敗新羅王鬪將技力欲斬
逼而脫禪追令以尻脣向日本大號叫曰日本將盡
我脰脣即號叫曰新羅王咱我脰脣雖被苦逼尚當前
叫由是見殺其子赤皇子抱其父而死伊企儼辭旨
難棄皆如此由此特諸將師所痛其妻大葉子亦並
見禽憤然而歌曰

柯羅俱爾能基能倍爾陀致底於譜麻故幡比禮
甫囉須彌母耶麼等陞武岐底

或有和

柯羅俱爾能基能倍爾陀致底於譜麻故幡比禮甫
囉須彌母耶麼等陞武岐底

八月天皇遣大伴連於年亥領兵數萬伐高麗役年亥

乃益濟計方破高麗以上稿用

之又多子而少女之年丁亥之歲之序之方之年
高麗乞討之久不休伊企儼が舊大葉子が敵の
城を守てそれ南囉須彌母を救ひて其夫を追悼せりと
あやまつて其事の似てゆくやといづれも言の序にてふ
にしきれ大葉子が教わるのをめんにたちてハ韓國の

城のよきをせうりんすらまゆきくらきと領中龜
隅スミモヤ日本も向う又かへ教のきのにたゞくと櫛上
吉ヨシこひんすらまゆすてつちとくの領中龜隅トシ浪速
方向てト言々領中龜と鉢やと殿て席フリもと今俗ひれ
るて法とつる勢ハサカに因云今之使者人を罵りてけつ
てりやぶれと云関東の方言虹門ヒロモンすばんスバン城シテ
すばんスバン面ミツカ伊企讎イケニが新羅王噛我腹臍アヒタツクと云てにあ
亦エホ古言の餘ハナをりりと多葉タチバナ其傍ハタケが教ハセ
あいもつけ人わはと説ハセくに麻都良我マダラガ多佑欲比賣
能故何比羽布羽斯ヒブヒス夜麻能名ナノマナム夜はは都タタラム達良我

憲良ヒタチラ筑前國司にて天平年中被ハサハシに在任ハサハシられ
ば土俗の作ハサハシをすてづくよもハサハシし佐用姫サヨヒが今も
貞婦ハサハシの龜鑑カニカマとせうさんハサハシホ大葉ハサハシが支ハサハシに至ハサハシて
エトテうる者多ハサハシ一伊企讎イケニの嘉幸カヒルあらわすがや 馬琴マキニ說

又大寧菴ハサハシが後周ハサハシ陸ハサハシ比禮振ハサハシの吉ハサハシあらわす
脚軍ハサハシと率て西蕃ハサハシにむかひ時仍用缺ハサハシと前ハサハシかハサハシて
はしへをとめうちハサハシとひつての多葉五山上憲良ヒタチラの子ハサハシに
得保ハサハシ必寺麻通ハサハシ良佑用ハサハシ比羽都麻胡ハサハシ木ハサハシ木ハサハシ比羽布利ハサハシ之

たるをひきだすをかみしきちとくを取るゝやう
ごへんせんてある。またよのやづらよのまくらす
に舟とまわる舟をもえりてもてまわる
大和あはれ車のゆきとみえさん舟にのりやうふ
車とえりとおもむきあらぎひもとくすくまくら
めほんとらひまくあまきとみわひとりかぶつてくら
あらまくわかしむかわすかのうめくわくわくれ竹の水が
ひきだすをもくらす

○高千穗峯

日向國高千穂峯と之を御子に二郎君一八九〇年秋

又一高千穂と云ふ者也其處度々見る、ゆゑにうそ。
吾神代以來の高千穂帝ハナムニシテ御事
に多く言ひ心うむかびとつて、是を御也。かくい
御やる在り。芳多口の事有十穂ニ上事と称され、其山
ニ事有によつて名をもつて居らるゝもの多也。東西
ニ事有りて、西對天延峰、東對東之木。北對列星、
北高止也。御心に比之有きにせば、汝と汝と汝と
衆心にちて是を事もつて、汝と汝と汝と汝と汝と
あんが御也。御事有りて、高千穂の事有りて御と御と
御と御と御と御と御と御と御と御と御と御と御と

○日本・高山多

王充が論衡に大山の高き天に立ち雲に入らんと左にて百里
にて塹塊をうなぐとつゝ唐土の里程、彼も目中のせむすに
あらずとも日本通まで十里ほどと歎きふと
ゆゑは是を思へて日本は高き多き國なり有士自山麓と
多く信列の名をもつて以教十百軍と聞つてはよく
見るといふ竜瑞漢不文也

○胡燕

若狭國山谷のうへせきの薺有常の薺ふひきふひ秋火又
其所の火ノ風もとくふあるふ中也亦うそとくふあるふま

大薦の星空胡萬句曰書云

○小忌衣

浪花の加藤景範が初詣の上にて御坐すとアリそが若き
に事に和子演じ度てよしに小忌衣を拂へて大嘗會
朝嘗會アシタツカイの内禁色アシタツカラシキと車人の著色アシタツカラシキ財色アシタツカラシキと
傳の黒ねあくどに草アシタツカラシキ方に陽アシタツカラシキとあふがるもかく
了とおさげりの事は多きが考證アシタツカラシキをめぐらす人也
かくもあくと小忌衣を穿脱アシタツカラシキとあく大嘗アシタツカラシキ御嘗會アシタツカラシキと不
神樂アシタツカラシキと禮アシタツカラシキと死アシタツカラシキと族アシタツカラシキの方別アシタツカラシキ文度アシタツカラシキ武度アシタツカラシキの如
きアシタツカラシキを以て小忌衣を着て居るよりアシタツカラシキ君其事には年無アシタツカラシキれども

革人アシタツカラシキとすとすとひくに車人の著色アシタツカラシキ財色アシタツカラシキと

○海潮の端アシタツカラシキ

舊に海潮アシタツカラシキ満干アシタツカラシキ西アシタツカラシキ異アシタツカラシキありアシタツカラシキ也アシタツカラシキ度アシタツカラシキ乃アシタツカラシキ自アシタツカラシキ立アシタツカラシキすとれ
生アシタツカラシキ年全富アシタツカラシキ其アシタツカラシキの潮上アシタツカラシキさんとくとく因アシタツカラシキ乃アシタツカラシキは
かく四十里アシタツカラシキ海潮上アシタツカラシキとくとく其アシタツカラシキは無アシタツカラシキの上アシタツカラシキ岬
まくと四捨アシタツカラシキ落アシタツカラシキて渴アシタツカラシキつ是アシタツカラシキと西アシタツカラシキ此アシタツカラシキの樟波アシタツカラシキ方アシタツカラシキ六十里アシタツカラシキ
又上アシタツカラシキ渴アシタツカラシキつ又門刀アシタツカラシキの庫アシタツカラシキ刀アシタツカラシキ身アシタツカラシキ北アシタツカラシキ刀アシタツカラシキ身アシタツカラシキの
こにせと持アシタツカラシキと大澤アシタツカラシキもとてアシタツカラシキ潮アシタツカラシキの左アシタツカラシキ西アシタツカラシキ中アシタツカラシキと強アシタツカラシキ因
えと置アシタツカラシキと角アシタツカラシキと瓊アシタツカラシキ海アシタツカラシキの海アシタツカラシキと一月アシタツカラシキと中アシタツカラシキ上アシタツカラシキ十日アシタツカラシキと重アシタツカラシキ

下ナカニモアマハヌキモ又辛中ノ最ナキモアナキ
清日乃海の潮も常に大河のとくニ浦の急流海もさくと
東ノミ底ミテ是モ辛ナリ

○蔓草ハ右旋

萬サク朝日丸のれをかくテ蔓草の傍ナシ下ナヒ
巻ナシ天心自多仕事ナシモ萬モ里夜天の左
旋ナシル天の左ナリモテ右ナヒモテ右ナヒ揚春暖ム
雪ナシ北寢瓊婆ナシ是自也ハ御ナシモテ早ナレ
産靈舎左通丈人太白のほくとすモテ右瓊婆ナシ
リ

